

ひだまり

令和4年12月2日(金)
足立区立中川東小学校
道徳通信 第7号
校長 豊田 純子
道徳教育推進教師 前田 康介

◇心の弱さに目を向けて…◇

イソップ童話「ありとぎりぎりす」のお話をご存知でしょうか。夏の暑い日、一生懸命に働き食べ物を蓄えるありと、楽しそうに歌を歌って過ごすぎりぎりすのお話です。冬が来ると、草木は枯れ、食べ物がなくなってしまう。そんな時、夏の暑い日に苦しみながらも働き続けたありは、おいしいご飯を食べながら笑顔で過ごします。ですが、夏の暑い日に、働かず、楽しい事しかしていなかったぎりぎりすは、食べ物を見つけることができずに苦しい思いをしまいます。この「ありとぎりぎりす」のお話は、2年生の道徳の教科書に掲載されています。2年生の子供たちは、「自分だったら、どうするだろう…?」と自分事として考えながら、自身の『心の弱さ』を見つめます。

「ありとぎりぎりす」のお話に似た出来事は、日常でもよく見られます。例えば、「宿題をやらずに、遊ぶ。結果、宿題が終わらなくなってしまう。」「夜遅くまで、テレビを見たりゲームをしたりスマホをいじったり…結果、朝しっかりと起きられない。」「どれも、原因は『心の弱さ』であると私は考えます。

道徳の学習では、そのような子供たちが自身の『心の弱さ』に向き合う機会を作っています。宿題の例で考えると、「どうした方が良いでしょう。」と問えば、ほとんどの子は「遊ぶ前にやるべき!ゲームは後からでいい。」と答えるでしょう。なぜそのように思うのか、理由を問うと「後々、苦しむのは自分だから。やらなければいけないことは、先にやっておいた方がいい。」と子供たちは答えると思います。そのように意識し、行動できたとしたら、とても素晴らしい考え、態度であると言えます。ですが、問いに対して模範的な答えは言えても…子供たちは実際に答えたことと同様に行動しているのでしょうか。

心の弱い部分は、誰しもがもっています。大人になれば、『心の弱さ』に負けた時の結果を予め見通すことができるため、すべきことや最善の策を考えて取り組むことができます。しかし、子供たちはまだ『心の弱さ』に自分一人で打ち勝つ術をもてていません。『心の弱さ』に負けそうな時、どんな思いをもつことが大切なのか、どのように気持ちを切り替えることが必要なのか、道徳授業の中で子供たちと今後も考え続けていきたいと思っています。

◇3年生の道徳の時間◇



<令和4年 11月7日小山学級>

教材名:	『メニューにない料理』
主題名:	相手を思う心(授業のテーマを「主題名」と表します)
ねらい:	相手の立場を考えて行動することの大切さに気づき、進んで親切な行いをしようとする心情を育てる。

今回のお話は、洋食屋の店主北橋さんが、いつもお店にやってくる胃の悪いお客さんのために、一晩中新しいメニューを考え、オムライスを完成させるという、オムライス誕生の実話がもとになっています。

「親切・思いやり」の道徳的価値を育む道徳の授業は、3年生になってから2回目でした。1回目の授業では、自分本位な行動ではなく相手のことを考えた行動が親切であり、相手を思いやる心の大切さを学びました。しかし、まだ自分事として捉え、考えるところまでは至っていない実態から、今回の教材で、相手に対しての思いやりの心や親切な行為とはどのようなものか考えることで、相手が何を求めているのか自ら進んで考え、自分なりにできることを判断して行動することの大切さに気付くことができるような展開にしました。

子供たち一人一人が、北橋さんのお客さんに対する様々な場面での親切な行いや相手を一生懸命思いやる心について考え、学習の終わりには、今までの自分の人との関わり方を振り返り、親切な行動をすることについて考えを深めていました。

